「散骨」

松馬羊志

【登場人物表】

松田修平（１８）工場勤務

松田文隆（５０）修平の父

松田早苗（５０）修平の母。写真のみ

○居酒屋

昼営業している場末の安い居酒屋。

松田文隆（５０）が一人酒を飲んでいる。

修平「おい！」

文隆、振り向くと

喪服姿の松田修平（１８）の姿。

修平、文隆を殴る。

椅子から転げ落ちる文隆。

修平「母ちゃんの葬式出ないで、こんなところで、酒飲みやがって！」

修平、逃げようとする文隆を掴み、殴る殴る殴る。

修平「お前がこんなんだから、母ちゃんは！」

朦朧とする文隆の胸ぐらを掴む。

修平「ついて来てもらうぞ」

修平、文隆を引きずっていく。

○電車・車内

ローカル線。

向かい合って座る修平と文隆。
修平、遺言と書かれた手紙を、文隆に投げつける。
文隆、遺言書を開く。
修平「母ちゃんの遺骨を海に撒く。あんたと一緒に。俺は嫌だが、母ちゃんのためだ。父親としてこれだけは果たしてもらうからな」
文隆を睨みつける修平の目。
文隆、目を逸らし、外を見つめる。
修平「なんでこんな奴と」
修平も外に目をやる。

○フェリー・客室
海の中を進むフェリー。
甲板では、風に煽られながら景色をじっと眺める修平の姿。
客室で俯いたままの文隆。

○海

上空からの映像。
フェリーがこじんまりした島の港に入って行く。

○小さな島・港（夕）
遺骨を抱えた修平、島民に道を聞いている。
その後ろでただ佇むだけの文隆。

○旅館・玄関（夜）
年季の入ったしなびた旅館。
修平と文隆を出迎える主人。
主人「遠路遥々、お疲れ様でございます」
ふと文隆の顔を見ると、腫れ上がっている。
目を逸らす文隆。
修平「気にしないで下さい。酔っ払いが転んだだけですので」
主人「ああ、そうですか。それは災難でしたね。ささ、お上がり下さい」

主人に促され、旅館に入っていく修平と文隆。

○同・客室（夜）

棚の上に遺骨と、松田早苗の遺影を置く修平。

テーブルには料理。

遺影を見ながら酒を飲む修平。

下を向いている文隆。

修平、古びた小説を文隆の前に放り投げる。

小説には、『ファン第一号、早苗へ。松田文隆』とサインが書いてある。

修平「小説はまだ書いているのか？」

文隆「……」

修平「たった一冊。大して名も残せず。その小さい成功にしがみついて。どーせ、書けてないんだろ？」

文隆、テーブルの上の酒を取ろうとする。

修平、テーブルを叩く。

修平「飲むなって言っただろ！ここの金、誰が払ってると思ってんだ」

文隆「……」

修平「あんたのくだらない夢のせいで、俺も母ちゃんも、どんだけ苦労したかわかってんのか！」

文隆「……」

修平「高校すら諦めて、中卒だって低い給料で働かされて、バカにされて！お前、見舞いにも来なかったな」

文隆、また酒に手を伸ばす。

修平「おい！聞いてんのか！」

修平、テーブルをひっくり返す。

文隆に殴りかかる。

修平「責任取れないなら、結婚なんてするなよ！お前の出来もしない夢のために、何で、何で、俺も母ちゃんも犠牲にならなきゃいけないんだ！」

文隆「……」

修平「何か言えよ！この野郎！父親らしい事、一度くらいしたらどうなんだ！」

主人が慌てて入って来て、修平を止める。

主人「お客さん！いけません！」

主人が二人を引き剥がすと、文隆は部屋の外へ出て行く。

修平「おい！また逃げるのか！」

床に転がっている皿を投げる。

主人「お客さん！」

×　×　×

散らかった料理や皿を片付ける主人。

その脇で酒を飲んでいる修平。

主人「小さい島です。夜は船も出てないです。すぐ戻って来ますよ」

修平「……」

主人「あの」

修平「はい？」

主人「お連れさん。初めてのお越しじゃないですよね」

修平「え？」

主人「顔、腫れていたし、随分前の事だから気づかなかったけどね。その写真を見て分かりました」

と、遺影を指す主人。

主人「お二人でね。２０年くらい前かな。いやぁ、仲睦まじかったなぁ。ご家族ですか？」

修平「違いますよ。家族だなんて……」

主人「……」

修平、遺影をじっと見て、酒をクイっと飲む。

○旅館・外（夜）

小説の文隆のサインが書かれたページが開かれている。

文隆、すすり泣く。

○島・港（朝）

小さな漁船に乗る修平と文隆。

○海（朝）

修平と文隆が乗せた漁船が進む。

○漁船（朝）

修平、骨壷から骨を取り出し、じっと見て。

修平「母ちゃん。さよなら」

と、骨を海へ投げる。

文隆は、俯いて座ったままだ。

修平、見兼ねて。

修平「おい。最後くらい母ちゃんの願いを叶えてやったらどうなんだ」

と、骨壷を突きつける。

受け取った遺骨をじっと見つめる文隆。

不敵に笑い始める文隆。

修平「何がおかしい？」

文隆「修平。お前は俺に嫉妬しているんだよ」

修平「あ？」

文隆「早苗は俺を見離さなかった」

修平「何が言いたい？」
文隆の胸ぐらを掴む修平。
文隆、早苗の骨を食べ始める。
修平「なにすんだ！」
修平が殴っても殴っても、食べるのを止めない文隆。
文隆「俺は諦めん。ここで誓ったんだ。夢を叶えて、お前を幸せにすって！早苗！そうだろ？」
泣きながら、大笑いする文隆。
修平「ふざけるな！」
修平、文隆を殴り続ける。
修平「俺はどうなるんだよ！俺はあんたの息子なんだぞ！あんたが産ませたんだ！」
文隆「お前なんて、どうでもいいんだよ！俺と早苗なんだ。これは俺と早苗の物語なんだ！それが言いたいんだろ？早苗！」
修平「吐き出せ！吐き出せよ！」
大笑する文隆の口に手を突っ込み吐き出させようとする修平。

文隆、構わず笑っている。

修平、殴る殴る殴る。

修平「母ちゃんを返せよ！」

文隆「修平、お前は、ずっと蚊帳の外なんだよ！生まれた時からずっとだ！お前はそれに嫉妬しているんだ！」

修平、力が抜けヘナヘナと座り込む。

文隆、泣きながら笑っている。

<end>